
スープの最期

子々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スーパの最期

【Nコード】

N9802B

【作者名】

子々

【あらすじ】

自殺志願者の澤井さんが最期の晩餐に選んだのは、私のスーパ。

澤井さんが何の前触れもなく私の家にやって来たのは、桜の花びらが散る日だった。突然の訪問に戸惑う私に幾度か謝りつつ、澤井さんは悠々とリビングへと向かった。度々、在来たりなお世辞を言っていたが、私は相槌すら打たずに、澤井さんの背中を不審に見つめる。

「突然やって来て、どうかしたのですか？」

リビングに入ると同時に私は尋ねた。澤井さんは頭を掻きながら、相も変わらず断りもなく椅子に座り、また一つ下手くそなお世辞を口にした。まるで私が無理に言わせているように、顔をくしゃりと歪ませて放たれるお世辞は、嫌味にも聞こえる。澤井さんは目をうように踊らせた後、頭を抱えた。そして、ぶちぶちと何かを呟き、彼が落ち着くまで時間がかかった。その間、私は昼御飯の残りのスープをよそって、澤井さんの前に置き、引きだしからスプーンを取り出した。

「こんなものしかありませんけど……」

澤井さんは何も言わずに、スプーンでスープを掬い上げ、薄い唇の間へひらりと流し込んだ。私は向かいの椅子に座り、その様を眺めていた。ひらり、ひらり、とスプーンが皿と唇を行き来する。

「菜津子ちゃんの作るスープはいつも美味しいなあ……」

にっこりと優しい笑みを浮かべて、澤井さんは言った。私はそれが直ぐに嘘だと確信し、嫌味の一つでも言ってるやろうと思ったが、言う事は出来なかった。最後の一口を掬い上げた時に、澤井さんは突然ぼたりぼたりと涙を流し始め、ついにはスプーンが皿の上に落下してしまった。それでも澤井さんは唇をぶるぶる震わせて、目を固く瞑り、眉間に縦皺を寄せて泣き続けていた。

「泣く迄、我慢して食べなくても……」

「泣く程、美味かったっ……」

冷めきったスープを出したのに、彼は何故泣く程美味しい等と言うのか。何となく、予想はついたが、黙っていた。

「僕は今日、死に行く……」

「泣くぐらいなら、今日は止したらどうですか？」

「それでも、行く」

「最後の晚餐はせめて、美味しいものを食べてはいかがですか」

「だから僕は、君の所へ来たんだよ」

澤井さんは私の兄の友人だ。彼はよく私の家に兄と共に訪れ、このスープを食べてはよく残していた。

兄が言った。「澤井がスープを全部食べ切ったら死ぬ前だよ」と少しばかり笑いながら。初めは意味が分からなかったが、どうやら澤井さんは自殺志願者なのだと理解した。そんな彼が兄にそう笑って話し、それを兄が私に笑って伝えた次第だ。

「私、澤井さんがどうして死にたいのか知りませんから、どうすれば止められるのか分かりません」

「それで良いんだ」

涙が止んだ澤井さんは、寂しげに言った。涙がばたばた落ちてしまったスープは、最後の一口分、虚しく皿に残っている。もう飲めたものではない。時計の針が一心に鳴き続ける中、私と澤井さんはジッと身動きすらとらずに、涙の溜まった皿に目線を落としていた。

「好きだったんだ、君のことが」

顔を手で覆いながらの告白は、恐ろしく低音で籠っていた。彼を止めるべきだ、と一瞬脳裏を走り抜ける。きつと後悔する、とも感

じている。気付けば、私の方が泣き出して、赤ん坊のようにわんわん声を上げて、嗚咽して、告白の返事はしないまま、ひたすら泣き続けた。彼はずるい人だ。ずるすぎて、涙が止まらない。

「美味しかったよ、スープ。ありがとう。本当に、ありがとう。：そろそろ、行ってくるよ」

「あなたは、ずるい方です」

「最後なんだ。大目に見てください」

パタパタ、廊下を歩く音が小さくなっていき、ドアが締まる音がひとつ。部屋には私とスープだけが虚しくとり残された。

今朝、兄から電話があり昼はスープを作っておくように言われた。兄は澤井さんが今日死ぬことを知っていたのだろう。兄ですら止められなかった彼の自殺願望を、私が止められるはずがない。そんなことがあれば、私は彼の人生を大きく変えてしまったようで居た堪れない。

澤井さんは、止めてほしかったのだろうか。何故、泣いたのだろうか。何故、今日なのか。疑問は浮かんで、シャボン玉のように直ぐに消えていった。

澤井さんが死んだかどうかは知らない。兄は教えてはくれなかった。あの日から3日後に男性の死体が発見されたそうだが、それが澤井さんのものだったのかは私には分からない。

(後書き)

久々の投稿です。お時間を取らせてしまい失礼しました。
まだまだ拙い文章です。これから精進して行きたいです。

2007. 5. 11

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9802b/>

スーパの最期

2010年10月9日00時31分発行